渡部　和（わたなべ かず）

からむしで紙を漉く

昭和村での暮らしは２年目に入った。私にはからむし織とは別に、もうひとつやりたいことがあった。紙を漉くことだ。

以前から手漉き紙に興味があり、産地を訪ねたり本で調べたりしていたが、実際に自分で紙を漉く機会はなかった。からむしの強い繊維で紙が作れたら、どんなに面白いだろう。

糸にするため畑で育てられるからむしのほかに、村には野がらむしと呼ばれる自生のからむしがたくさんある。田の畔などに生えているのを、持ち主に頼んで刈らせてもらった。

東京にいた頃、自然界にあるものは誰でも自由に採取していいものだと思っていた。山にも持ち主がいること、特に田畑の近くのものはたとえ雑草でも勝手に取ることはならないという当たり前のことですら、村に来るまで知らなかった。

借りていた家の車庫に大きなコンロを置き、ドラム缶でからむしの繊維を煮る。煮た繊維を広げ、棒で根気よく叩いて柔らかくする。冬は玄関の土間にストーブを置き、鍋の湯で手を温めながら紙を漉いた。

からむしが見せる様々な表情が面白く、紙のかたちにとらわれないものを作り始めると、少しずつ売れるようになった。村では新しく来た織姫さんたちの作業を手伝う仕事を用意してくれた。貯金を切り崩しながらの生活だったが先のことをほとんど考えなかったのは、好きなことを思いきりできる喜びが大きかったからだ。

東京には必要なものがたいてい揃っていたが、ものづくりをしたいという気持ちが強くなればなるほど、そうした簡便さや、お金で手に入るものに違和感を覚えるようになっていた。本当にしたかったのはこういうことだったんだと、やっと居場所ができたように安堵した。

紙漉きという、本来のからむしの在り方とは違う道を選び始めたことにうしろめたさもあったが、村の人は快く手助けしてくれた。季節になれば冬至南瓜を届けてくれる人、樽と白菜を抱えてきて漬物を仕込んでくれる人、慣れない雪道運転の練習につきあってくれた若い人もいる。いろいろな人から村にいることを応援してもらい、自分の道が見えてくる喜びに満たされて、私はまだ、夢の中にいた。